

生きるための天文学からアートとしての天文学

尾久土正己

今年1月、教養の森の人たちに誘われ、観光学部と兼務をすることになった。ちょうど私自身も教養の森でやりたいことが芽生えていた。その1つが「生きるための天文学」、「アートとしての天文学」である。もちろん、「生きるため?」、「天文学にそんな効用?があるのか?」といきなりイチャモンがつくに違いない。私も少し前までは天文学にそんな力があるとは思っていなかった。

2009年夏、和歌山県で日本ボランティア学会が開催されたとき、実行委員長だった堀内秀雄さんから何か話をして欲しいと頼まれた。その頃の私は、全国の日食ファンとボランティアチームを作って皆既日食を世界中に中継するプロジェクトを走らせたり、県内の公開天文台の研究者たちとネットワーク型の研究グループを立ち上げたりと、自分たちの夢に向かって忙しくしていた。講演を前に、「自分たちはボランティアグループには違いないが、1995年の阪神大震災後に俄かに注目され始めたボランティア活動とは少し違うな・・・」と発表内容について悩んでいたことを覚えている。一般的にボランティア活動の多くは困っている人たちを支援するような活動ばかりだったからだ。一方で、そもそもボランティアとは自発的な活動を指すものなので、私たちの取り組みもボランティアに違いない。ただし、困っている誰かのためではなく、自分たちが虜になってしまった日食や宇宙の魅力を多くの人たちに伝えたいという勝手な想いで活動しているだけだった。とにかく、頼まれた以上は、自分たちの熱い想いを語ろうと日食の話や県内での天文活動の話をした。

講演が終わったあと、そのとき初対面だった上田假奈代さんから「釜ヶ崎で天文学の話をしてもらえませんか?」と声をかけられた。私は学生時代を大阪市の天王寺区にある大阪教育大学で過ごしたので、釜ヶ崎の地名は良く知っていた。私の釜ヶ崎のイメージは「怖いところで行ってはいけないところ」だった（実際に中に入ったことはなかった）ため、なぜ天文学の話で声をかけられたのか理解できなかった。釜ヶ崎と聞いてどんなところかご存知でない方のために簡単に紹介しておこう。釜ヶ崎は大阪市西成区にあり、日本最大の寄せ場で日雇い労働者の街である。劣悪な環境の中、幾度か労働者による暴動が起きており、そのことによって「行ってはいけないところ」というイメージが定着している。現在は、高齢化や長引く不況、家族との分断などにより、男性の単身高齢者の街になり、多くの野宿生活者や生活保護受給者を生み出している（1）。上田さんたちはそんな釜ヶ崎で、詩などの表現活動を通じて地域の課題を解決していこうとするアー

ト NPO（こえとことばとこころの部屋（愛称ココルーム））を運営していると言う。釜ヶ崎でアートも理解できなかったが、アートができるなら天文学もと、あまりよく考えずに引き受けることにした。

その後、実際に私が釜ヶ崎でデビューしたのはその年の12月19日だった。まずは、下見をしなくてはと、直前に上田さんに釜ヶ崎とその周辺（例えば飛田新地など）を案内してもらった。通っていた大学からは目と鼻の先であったが、初めて見学した釜ヶ崎が、決して「行ってはいけないところ」でないことが理解できた。そこで、講演は「釜ヶ崎から宇宙へ」というタイトルにし、街中でほとんど星空は見えないものの、その上に広がっている恒星世界の話をすることにした。高齢者が多いと聞いていたので、例えば「織姫は25光年離れているので、今から25年前の光が今届いている」と言った感じで、受講生の人生とリンクできるような内容にした。当日は、普段の講演会とは違ういわゆる「おじさん」中心の客層と、彼らの真剣なまなざしに、自己紹介の際に、普段は人前では言わない自分の辛い過去の話をしてきた。講師として話に行ったはずなのに、知らぬ間に自分の人生相談のような感じになっていた。具体的な恒星の話になったとき、「せっかくなので、外で実際の星空を見ましょう」と、裏路地の建物の隙間に広がる狭い夜空の中に織姫などの1等星を探して解説した。織姫が1984年の輝きだと知ると、大阪の明るい夜空の中ではか弱くしか見えない星の光をおじさんたちは懐かしそうに眺めていた。また講義の中では次々と質問が飛び出し、大学でもこんな活発な授業はしたことがない、これぞまさにアクティブ・ラーニングだと感心した。このようなおじさんたちの授業態度に応えようと、「年末に、望遠鏡を持ってまた来ます。一緒に天体観測しましょう！」と予定外の次の講座を決めてしまった。

初めての天体観望会は12月29日に、釜ヶ崎の中心にあり様々なイベントが行われる三角公園で行った。年末は毎年、仕事がなく、野宿する人が増えるということで、公園で越冬闘争というイベントが開催されている。観望会もココルームを通じて、越冬闘争の1つの演し物として、炊き出しと同じ時間に行った。大きな望遠鏡を三角公園に組み立てていると、おじさんたちが次々と近づいてきて、「お前はどこのもんで、何をしに来たんや？」などと聞かれた。その度に「一緒に星を見ようと、和歌山大学から来ました」と答えたのだが、理解してもらうことはできなかった。望遠鏡の設置が終わっても、炊き出しに並ぶ行列がこちらに来ることはなかった。周囲にいたおじさんたちに声をかけ、だましだましに見てもらったところ、感動したおじさんが他のおじさんを連れてくるなどして、気がつけば望遠鏡にも行列ができていた。すでに見たおじさんたちは私の解説を真似して、指導員になってくれたり、列を整理してくれたりした。望遠鏡を覗いたあ

とのおじさんたちの反応は、天文台勤務時代に経験した数えきれないほどの観望会のいずれの反応よりも良いものだった。私自身を含め天文教育に取り組んでいるほとんどの人たちは、天文学の成果を納税者に還元することで国民の理解が高まり、そのことが将来の予算獲得につながるとか、子どもたちへの活動の中から次の研究者が生まれるかもしれないと言った、天文学コミュニティの側に立った活動をしていた。しかし、釜ヶ崎のおじさんたちは、将来の予算獲得に影響することもなく、また研究者になることもない。ただ単に、好奇心で望遠鏡を覗き、向学心で講座を聴く。その結果、炊き出しのご飯が空腹を満たすように、望遠鏡の中の天体や天文学の話が生活の質 QOL を向上させるきっかけになることを教えてくれた。「生きるための天文学」というものがあることをこうして知った。

その後も年に2〜3回、講座と観望会をセットにした天文学の教室を続けていた。一方、ココルームでは、「学びたい人が集まれば、そこが大学になる」と、2011年から「釜ヶ崎大学」を立ち上げ、何度か講座を開いていた。2012年からは、「釜ヶ崎芸術大学」に名称変更し40〜60の講座を開講している。その中に、「天文学」の授業も開講され、私が講師をしている。2013年度は、お笑い・音楽・絵画・ガムラン・感情・狂言・芸術・詩・書道・写真・地理・哲学・天文学・表現の14教科が開講されている(2)。当初は、2009年から始めていたスタイルで講義を行っていたが、よく考えると地理学、哲学があるものの、他はすべて表現活動(アート)である。天文学を表現活動に結びつけるにはどうしたら良いか、現在、試行錯誤を行っている。釜ヶ崎芸術大学は、2014年には現代美術の国際展であるヨコハマトリエンナーレに招待され、ココルームの交流の場が美術館の中に再現され、おじさんたちの成果物が展示された(3)。私が担当する天文学も10月8日の皆既月食に合わせて、三角公園とテレビ会議で結んで横浜美術館で開講した。横浜会場に集まった市民たちは、おじさんたちの自由な表現活動に圧倒されていた。

歴史を振り返れば、天文学と音楽は同じ範疇にあった時代がある。例えば、天王星を発見したハーシェルは、交響曲を作曲するほどの音楽家でもあった。釜ヶ崎は我が国の様々な社会的課題が凝縮し目立っているだけに過ぎず、同じような課題はどこにでもあるに違いない。そう考えると、釜ヶ崎での活動を通じて取り組み始めた「生きるための天文学」、「アートとしての天文学」は、すべての地域のすべての人たちに受け入れられるに違いない。まずは、和歌山大学の学生たちにも受講してもらいたい。私がこの1月、「教養の森」センターを兼務することになった一つの理由がここにある。



釜ヶ崎の三角公園での観望会の様子。多くの「おじさん」たちが集まってくる。

参考文献

- (1) 原口剛他編著、「釜ヶ崎のススメ」、洛北出版（2011）
- (2) 特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）編、「釜ヶ崎芸術大学 2013 報告書」（2014）
- (3) ヨコハマトリエンナーレ 2014、第 2 話「漂流する教室にであう」、平凡社（2014）